

今日は休日。『マナ』は仕事で疲れてまだ寝ている。『のら』はとうとう、ゴロンゴロンと押入れの中で何かを探している。「ベンジャミン、ベンジャミン」そう言いながら、『マナ』もさすがにうるさいのか、その物音で目を覚ました。『のら』うるさいぞ。「そう言えば先日『のら』が変なことを言っていたのを、『マナ』は思い出した。「ベンジャミン、ベンジャミン。うーん。ベンジャミンする」。確かそんな事を言っていた。そして『のら』は「これこれ」と言っつて変な袋を引っ張り出してきた。「何それ」と『マナ』が尋ねると、『のら』は「これ美味しいの」と言っつて、台所へと消えていった。

『マナ』は『のら』の「美味しいの」と言っつ言葉に、不安を感じながら朝食を食べ始めた。特に変な物が入っていないかったようで、何事も無く『マナ』は朝食を食べ終えた。すると突然『のら』が、「ベンジャミンする」と『マナ』に言った。『マナ』は「う」と言っつて、不思議そうに眉を下げ、怪訝そうな顔をした。「ベンジャミン。何それ」と『のら』に言い返すと、すかさず『のら』は「はいお茶」と言っつて、『マナ』に湯飲みを差し出した。『マナ』は何気なくそのお茶を口にしたら。その瞬間『マナ』は驚きのあまり、お茶を吐き出した。「何だこれ」。『のら』は「ベンジャミン」と言っつて自分もお茶を飲み、「あー美味し」と言っつた。『マナ』はその時この飲み物が、さっき『のら』が探していたものと察した。『マナ』は急須の蓋は外してその中を覗いた。そこには幾つかの丸い物体がプカプカと浮いている。『マナ』はその匂いを嗅いだ。それはほんのり甘いような感じで、体の疲れが取れて行くような不思議な感覚であった。

